

《研究ノート》

近世後期の庶民の旅と草鞋

谷釜 尋徳

1. はじめに

日本における近世後期は庶民層の旅が流行を博した時代である。現代と比べて移動手段に乏しい近世社会にあって、庶民は道中の大半を自らの脚を頼りに移動した。彼らの1日あたりの歩行距離は平均して30km台であったが、多い時には50kmを超す距離を歩いている⁽¹⁾。そんな彼らが、旅の道中で長い距離を歩むための履物として選び採ったのが「草鞋^{わらじ}」であったが、この履物は旅人の健脚を支える役割を果たしていたと考える。この意味で、近世後期の庶民の旅は草鞋の存在を抜きにしては語れないといわねばなるまい。

ところが、従前の近世旅行史研究において、草鞋をはじめとするモノに対するアプローチは希薄であった。その一方で、草鞋は民俗学における民具研究⁽²⁾の対象として頻繁に取り扱われてきたものの、それは必ずしも歴史の時間を軸にして語られてきたわけではない。民俗学は歴史的資料の記録から漏れた当該「民俗」に関する相対年代を提供するが、その情報には絶対年代を期待するこ

(1) 拙稿「近世後期の庶民の旅にみる歩行の実際」『スポーツ史研究』20号、2007.3、1～22頁。
／拙稿「近世における江戸庶民の旅の歩行距離について」『東洋法学』52巻1号、2008.9、23～40頁。

(2) 「民具」という用語をはじめて提唱したのは、アチック・ミュージアム主宰の渋沢敬三であったが、同研究所編集の『民具蒐集調査要目』によれば、民具とは「我々の同胞が日常生活の必要から技術的に作り出した身近卑近の道具」(アチックミュージアム編『アチックミュージアムノート 第七 民具蒐集調査要目』アチックミュージアム、1936、1頁)であると定義されている。

とが難しいためである。

こうした動向にあって、旅人と草鞋を関連づけて論じた歴史研究がこれまで若干試みられている。独自の絵画史料論ないし歴史図像学を展開する黒田は、中世の絵巻物（『一遍上人絵伝』）を手掛かりとして、寺社門前や宿場町、峠などで旅人向けに草鞋が販売されていたことを明らかにし、これが中世的な交通を可能にした1つの条件であったと指摘する⁽³⁾。黒田が対象としたのは中世旅行史であったが、近世史を扱う本稿の内容は基本的な部分でこの黒田の指摘にヒントを得たものである。また、拙稿では近世後期において旅人が着用した草鞋にまつわる諸事情に若干触れてはきたものの⁽⁴⁾、その考察は草鞋のみにフォーカスしたものではなかったため詳細を語るには至っておらず、再度検討を要するところである。

そこで本稿では、当時の旅に不可欠な履物としての「草鞋」に目を向けて検討していきたい。具体的には、①近世後期の旅における草鞋の位置づけを文献によって確かめ、②次いで、絵画史料を通して旅人の草鞋着用の割合と街道筋の草鞋の販売について検討し、③最後に、旅日記を用いて草鞋の値段と耐久性を明らかにする、という順序をもって論を展開するものとする。

なお、本稿では史料の制約上、庶民男性の旅を中心に扱うことを断っておきたい。

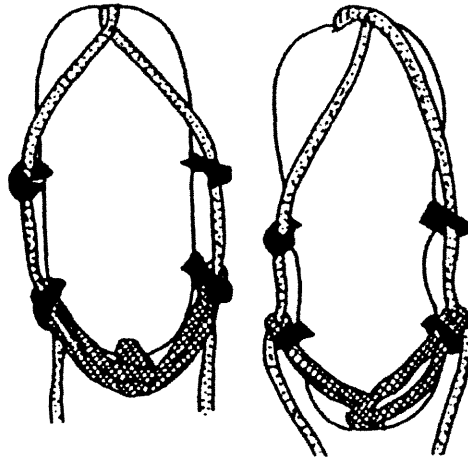
2. 旅装としての草鞋の機能と重要性

『日本交通史辞典』で「草鞋」を引くと、そこには「労働や旅行の際に用いられる稲藁で編んだ履物の一種。」⁽⁵⁾と定義されている。ひとくちに草鞋といってもその種類は多岐にわたるが、我が国の草鞋は基本的に乳（台側面の緒を通す環）、カエシ（踵を固定する紐）、緒、台座の4部から成る⁽⁶⁾。後に分析対

(3) 黒田日出男「旅と信仰」『絵画資料で歴史を読む』筑摩書房、2004、47～66頁。

(4) 拙稿「近世後期の庶民の旅にみる歩行の実際」『スポーツ史研究』20号、2007.3、1～22頁。
／「近世後期の庶民による旅の長距離歩行を支えた旅装の実際」『日本体育大学紀要』37巻1号、2007.9、25～38頁。

(5) 潮田鉄雄「草鞋」『日本交通史辞典』吉川弘文館、2003、946頁。

図1 四乳草鞋[※]

※潮田鉄雄「草鞋」『日本交通史辞典』吉川弘文館、2003、946頁より転載。

象とする旅日記は関東地方の庶民によるものであるが、当該地方に広く分布していた草鞋の形態は四乳草鞋（図1）であったという⁽⁷⁾。

その着用方法は、台座の爪先から出ている2本の緒を2～3回燃って足指に挟み、緒は両側に分けて各々の乳やカエシに挿入して足首で結わく。そのため、爪先で引っ掛けるだけの草履^{そうり}とは異なり、草鞋は踵と台座が固定されているため長距離の歩行には適していたといえよう。

ゆえに、近世における訪日外国人の見聞録をみると「旅人が利用するものには、燃った二本の藁紐が付いているので足にしっかりと結ぶことができ、容易にぬげるようなことはない」⁽⁸⁾や「人夫や兵士や旅人たち、要するに脚を束縛なく自由に動かす必要のある人はみな、サンダル同様、靴の後部を足に結わえつけ、身体の動きが自由にとれるようにしている（草鞋のこと—引用者注）。」⁽⁹⁾などといった記録が確かめられる。

(6) 潮田鉄雄『ものと人間の文化史8—はきもの—』法政大学出版局、1973、135頁。

(7) 潮田鉄雄『ものと人間の文化史8—はきもの—』法政大学出版局、1973、135頁。

(8) ツェンベリー「江戸参府旅行日記」高橋文訳『江戸参府旅行日記』平凡社、1994、114頁。

近世後期の旅の流行と相まって多数刊行された道中記（＝旅行案内書）の中にも、草鞋に関する注意書きが見受けられる。例えば、八隅蘆庵が文化7（1810）年に著した『旅行用心集』には、「道中用心六十一ヶ条」の第1ヶ条目に次のように記されている。すなわち、蘆庵は「初て旅立の日ハ足を別而静に踏立、草鞋の加減等を能試、其二、三日が間は所々にて度々休、足の痛ぬやうにすべし。」⁽¹⁰⁾と説き、出立したばかりの頃は「草鞋の加減」を確かめながら少しずつ歩むべきである旨の用心を認めているのである。

また、蘆庵の著作に影響を受けた平亭銀鷄は天保4（1833）年に『江の島まうで浜のさゝ波』を著している。同書にはより具体的に草鞋を履いて歩行する際の注意事項が記されているので、以下に引いておきたい⁽¹¹⁾。

「道の三、四里もゆくときは草鞋のあんばい兎角足になじみかぬるもの也、其時は直さまに紐をときてむすびかへしつかりとはき直すべし、あしきわらじははやくぬきかゆべし、草鞋は旅人の為には甲冑におなじ、価ををしまずよきわらじをもとめはくべし、わらじのぐあひあしきを其まゝにて歩行ときはたちまちわらじくひを生し、其上くたびれをますこと是に過たるうれひなしと知るべし」

銀鷄は、道中を3～4里（約11.7～15.6km）程度歩いてみて草鞋に不具合を生じた場合は直ちに紐を解いてもう一度履きなおすか、それが悪質な草鞋であれば履き替えるべきであるという。また、「草鞋は旅人の為には甲冑におなじ」なので、値段を惜しまずに良質な草鞋を購入すべきことや、足に馴染まない草鞋を履き続けると「わらじくひ」（草鞋食い）を生じて足に負担がかかり、悪循環が起けると説く。

（9） スエンソン「江戸幕末滞在記」長島要一訳『江戸幕末滞在記』講談社、2003、107～108頁。

（10） 八隅蘆庵『旅行用心集』（1810）今井金吾解説・注『旅行用心集』八坂書房、1972、15頁。

（11） 平亭銀鷄『江の島まうで浜のさゝ波』（1833）『神奈川県郷土史料集成 第七輯 紀行篇』神奈川県図書館協会、1972、240頁。

この草鞋食いとは「わらじの緒で足の皮がすりむけること」⁽¹²⁾を言うが、草鞋は藁紐を足の甲と足首に結わく履物であることから、藁と擦れ合って足を痛める危険性があった。例えば、『東海道中膝栗毛』(1802～09)の中で「はきつけぬ草鞋で、コレ見や、あしちうが豆だらけになった(中略)これはあんまり足がやはらかだから、わらじのひもがくへこんだのだ。」⁽¹³⁾という場面が滑稽に描写されているように、草鞋食いは決して稀なアクシデントではなく、頻繁に起こり得る事態であったと思われる。

それゆえに、こうした危険性を予防すべく工夫された草鞋の存在が、安永4(1775)年来日のツェンベリーによって「足の甲がこの紐で擦れないよう、その上にリンネルの布が巻かれているものもある。」⁽¹⁴⁾と記録されていることは興味深い。しかし、近世後期に刊行された名所図会の挿絵や街道をテーマとした浮世絵の中に、この種の工夫が施された草鞋が頻繁に描き込まれているわけではない。そのため、本稿では現段階でこれを「特殊」な草鞋と見なし、深く掘り下げて検討することは控えるものとする。

以上述べてきたように、旅の移動が徒歩中心であった近世においては、旅人の足に対する気配りは並々ならぬものがあり、そのような観点から履物としての草鞋も重要視されていたといえよう。

3. 絵画史料にみる旅人の草鞋着用の割合と街道筋の草鞋の販売

3-1 旅人の草鞋着用の割合

以下では、近世後期における旅人の草鞋着用の割合を知るべく、「名所図会」の挿絵に手掛かりを求めて数量的な分析を行なうものとしたい。当該史料は「実景描写の挿画を多数加えた地誌風な読み物」⁽¹⁵⁾と説明されるが、その写実的な挿絵には、名所旧跡などの風景のみならず旅人の装いも事細かに描写されて

(12) 松村明編『大辞林 第三版』三省堂、2006、2748頁。

(13) 十辺舎一九「東海道中膝栗毛」(1802～09)『東海道中膝栗毛(下)』岩波書店、1973、17頁。

(14) ツェンベリー「江戸参府随行記」高橋文訳『江戸参府随行記』平凡社東洋文庫、1994、144頁。

(15) 中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義編『角川古語大辞典 第五巻』角川書店、1999、604頁。

いる。

ここで用いる名所図会は、比較的多くの旅人の姿が描かれている『拾遺都名所図会』⁽¹⁶⁾ (1787)、『東海道名所図会』⁽¹⁷⁾ (1797)、『伊勢参宮名所図会』⁽¹⁸⁾ (1797)、『江戸名所図会』⁽¹⁹⁾ (1834) である。この4点の名所図会に掲載された挿絵の内容を読み取っていくという方法で、「人数」と「割合」を抽出して作成したものが表1である。ただし、挿絵の中に旅人の姿が確認できたとしても、その旅装が肉眼では確認し得ないほどに小さく描かれている場合があるので、その旅人は分析対象とした旅人の数（計351人）には含まれていない。また、「人数」部分の（ ）内の数字は、人や建物の影に隠れて草鞋着用の有無を知ることができない人数を示したものである。なお、上記4点の名所図会の挿絵に関していえば、女性の旅人は男性に比して描かれ難いという特徴がみられることを理由に、ここでは分析対象を男性に限っている。

表1によれば、どの名所図会においても8割から9割程度の旅人が草鞋を着用していることが確かめられる。ゆえに、名所図会の挿絵が当時の旅の実際を反映しているとすれば⁽²⁰⁾、旅人の大半は草鞋を着用していたと見なしてよか

表1 旅人（男性）の草鞋着用の割合

史料名（年代）	旅人の数	草鞋の着用	
		人数	割合
拾遺都名所図会（1787年）	53人	46(1)人	88%
東海道名所図会（1797年）	25人	20(2)人	86%
伊勢参宮名所図会（1797年）	202人	125(72)人	96%
江戸名所図会（1834年）	71人	56(3)人	82%

(16) 秋里籬島編・竹原春朝斎画「拾遺都名所図会」（1787）『日本名所図会全集13』名著普及会、1975。

(17) 秋里籬島編・竹原春朝斎ほか画「東海道名所図会」（1797）『日本名所図会全集5・6』名著普及会、1975。

(18) 蔀関月編・画「伊勢参宮名所図会」（1797）『日本名所図会全集11』名著普及会、1975。

(19) 斎藤月岑ほか編・長谷川雪旦画「江戸名所図会」（1834）『日本名所図会全集1～4』名著普及会、1975。

ろう。

しかし、ここで気になるのは1割程度の割合で描かれた草鞋を着用していない旅人の存在である。絵画作品は各々の時代性や地域性を反映した一定の記号表現によって描かれているとされるが⁽²¹⁾、おそらく名所図会の挿絵において草鞋とは、街道筋の旅人や肉体労働者を示す記号表現の1つであったと思われる。それでもなお、服装や携行品などから明らかに旅人と認識される人物が草鞋を履かない姿で描かれていることは、道中の旅人が漏れなく草鞋を履いていたわけではなかったという可能性を想起させるものである。

そこでまずは、名所図会に描かれた草鞋を履かない旅人が一体何を履いていたのかを検討しておきたい。図2は『江戸名所図会』に所載の挿絵の1枚であるが、ここに描かれた3人は菅笠、脚絆、杖、脇差などを着用していることから、旅人であると判断できる。次に、彼らの足下を参照されたい。向かって左から2人目までは足の甲と踵に紐が結わかれており、草鞋を履いていたことが確かめられる。ところが、一番右側の旅人の足下を注視してみると、足に紐が結わかれている様子はなく鼻緒のみが描かれている。この旅人は草鞋ではなく「草履^{ぞうり}」を履いているのである。

絵画史料のみならず、関東地方の庶民男性が記録した旅日記のうち『意雑紀』⁽²²⁾(1807)、『道中記』⁽²³⁾(1809)、『旅中日用記』⁽²⁴⁾(1864)には草履の購

(20) こうした観点から名所図会の史料価値を高く評価したものとして、以下の諸論稿をあげることができる。千葉正樹『江戸名所図会の世界』吉川弘文館、2001。／石川英輔『江戸のまかない』講談社、2002。／福田アジオ「生活絵引編集の世界的意義」『非文字資料から人類文化を読み解く』神奈川大学21世紀COEプログラム、2006、36～42頁。／本渡章『大阪名所むかし案内』創元社、2006。／石川英輔『ニッポンの旅』淡交社、2006。／福田アジオ『『東海道名所図会』と生活絵引』『日本近世生活絵引—東海道編—』神奈川大学21世紀COEプログラム、2007、105～109頁。

(21) パノフスキー著、浅野徹訳『イコノロジー研究』美術出版社、1971、3～33頁。／黒田日出男「御伽草子の絵画コード論入門」『歴史としての御伽草子』ベリカン社、1996、53～131頁。

(22) 大場鈴之助「意雑紀」(1807)『伊勢道中記史料』世田谷区教育委員会、1984、190～204頁。

(23) 牧野勘四郎「道中記」(1809)『江東区資料 牧野家文書二』江東区教育委員会、1995、18～39頁。

(24) 「旅中日用記」(1864)『狛江市史料集 第十』狛江市、1979、68～86頁。



図2 旅人の履物（『江戸名所図会』部分）※

※斎藤月峯ほか編・長谷川雪旦画「江戸名所図会」（1834）『日本名所図会全集2』名著普及会、1975、677頁より転載。

入記録が確かめられるため、実際に道中で草履を履いた旅人がいたとみてよい。ただし、上記の旅日記には草履のみならず草鞋の購入記録もみられるので、当該の旅人は終始草履だけを履き通したのではなく、草鞋と併用していたと考えるのが自然であろう。だとすれば、旅人はどのような場面で草鞋と草履を使い分けていたのかが問題となるが、そのことを知る手掛かりは現段階では得られていない。

ともあれ、ここでは道中の履物として草履を選び採る旅人も少数ながら存在したが、それは草鞋と併用する形で使い分けられていた可能性を提示するにとどめておきたい。

3-2 街道筋の草鞋の販売

以上、名所図会の挿絵の分析を通して、近世後期の旅人の大半が草鞋を着用していたことが明らかとなった。それでは、彼らはどこで草鞋を入手（購入）



図3 宿場での草鞋の販売(『木曾街道』部分)[※]

※英泉画「木曾街道」(1835)『広重・英泉の木曾街道六拾九次旅景色』人文社、2001、9頁より転載。

していたのであろうか。そこで以下では、浮世絵や名所図会の挿絵の中から、街道筋で草鞋が販売されている場面を抽出してみることにしたい。

① 宿場での草鞋の販売

まずは、宿場で草鞋が販売されていた事例を溪斎英泉の描いた『木曾街道』(1835)から抽出する。図3は中山道板橋宿を描いたものであるが、画中右上をみると店先に複数の草鞋が吊るされている様子が見て取れる。旅人が休憩ないし宿泊する宿場には、草鞋が販売されていたのである。

ちなみに、画中で前屈みになっている男性は、馬の草鞋を交換している最中であるが、近世の日本では滑り止めや蹄を保護するために馬に草鞋を履かせることが定着していたという。このことは、幕末期に来日したアンベールの「日本人は馬に蹄鉄を打たず、藁靴をはかせる」⁽²⁵⁾ という記述によっても裏付け

(25) アンベール「幕末日本図絵」高橋邦太郎訳『アンベール幕末日本図絵』雄松堂出版、1969、253頁。

(26) 黒田日出男「馬のサンダル」『姿としぐさの中世史』平凡社、1986、112～118頁。

られるが、具体的な内容は黒田の研究⁽²⁶⁾を参照されたい。

② 茶店での草鞋の販売

次に『江戸名所図会』（1834）より、中山道浦和宿の手前に位置する焼米坂の模様が描かれた挿絵を取り上げる（図4参照）。当地は名物「焼米」を往来の旅人に販売していたことで知られるが、画中右上を見ると草鞋や草履が店先に吊り下げられ、これも併せて販売されていたことが窺える。

名物の食べ歩きは近世的な旅の楽しみ方の1つであったが、街道筋の茶店で名物を購入するついでに擦り切れた草鞋を新しい物と交換（購入）することがあったと考えられよう。換言すれば、これは茶店側の経営戦略でもあった。

③ 草鞋売りによる草鞋の販売

旅人が草鞋を入手する方法は、宿場や茶店の店先で立ち寄ったついでに購入するばかりではなかった。絵画に描かれた旅の世界には、草鞋の販売を主たる



図4 茶店での草鞋の販売（『江戸名所図会』部分）※

※斎藤月岑ほか編・長谷川雪旦画「江戸名所図会」（1834）『日本名所図会全集3』名著普及会、1975、1332頁より転載。



図5 草鞋売りによる草鞋の販売①(『伊勢参宮名所図会』部分)[※]

※ 部関月編・画「伊勢参宮名所図会」(1797)『日本名所図会全集 11』名著普及会、1975、235頁より転載。

生業とする者の存在が確かめられるからである。

図5は『伊勢参宮名所図会』(1797)に所載の挿絵であるが、ここには旅人に草鞋の購入を勧める子ども(草鞋売り)の姿が描かれている。画中右側には草鞋を作る子どもも確かめられ、製造と販売を分担していた様子が見て取れるが、彼らは近隣の農村から出稼ぎにきていたという見方もある⁽²⁷⁾。

また、図6は『東海道名所図会』(1797)の挿絵であるが、この子どもは複数の草鞋を背負い手にも草鞋を握っていることから、草鞋売りであると見てよい。図6は挿絵を部分的に拡大しているので建物の外観は判明しないが、子どもは宿泊客に草鞋を販売すべく旅籠に足を踏み入れている。

このように、街道筋では草鞋売りから草鞋を購入することがあったといえよう。

(27) 旅の文化研究所編『絵図に見る伊勢参り』河出書房新社、2002、51頁。



図6 草鞋売りによる草鞋の販売②（『伊勢参宮名所図会』部分）※

※秋里籬島編・竹原春朝斎画「東海道名所図会」（1797）『日本名所図会全集6』名著普及会、1975、615頁より転載。

以上検討したように、旅人は道中の至るところで草鞋を購入できる環境に恵まれていた。この事実、旅人が道中で大量の草鞋を持ち歩く必要がなかったことを意味している。ここに、旅人の長距離歩行を支えた街道事情の一端を見出すことができよう。

なお、17世紀に来日したケンペルが「草鞋はどこの村でも吊して売っているし、また乞食の子供たちが街道で売付けようとする」⁽²⁸⁾と述べ、18世紀に来日したツェンペリーが「一般に旅人が通り過ぎるような町や村は、たとえばそんなに小さな村でもすべてこれを売っている。」⁽²⁹⁾との見聞を記録していることを鑑みれば、街道筋における草鞋の販売は、すでに近世初期頃から盛んに行

(28) ケンペル「江戸参府旅行日記」（1777～79）斎藤信訳『江戸参府旅行日記』平凡社東洋文庫、1977、10頁。

(29) ツェンペリー「江戸参府随記」（1793）高橋文訳『江戸参府随記』平凡社東洋文庫、1994、144頁。

われていたと考えられる。

4. 旅日記にみる草鞋の値段と耐久性～関東地方の庶民の場合～

4-1 旅日記にみる草鞋の値段

以上述べてきたように、近世後期の旅人は道中の至るところで草鞋を購入することができたが、実際の草鞋の販売価格はどの程度であったのだろうか。表2は近世後期における関東地方の庶民による伊勢参宮の旅日記の中から、購入した草鞋の値段が明記されている11編⁽³⁰⁾を抽出し、その平均額、最高額、最低額を一覧にしたものである。なお、本表は旅の全行程の中から江戸～伊勢間(往路)を対象として作成した。

本表によれば、1803～1864年の期間における草鞋の平均額は、幕末期にかけて値上がりする傾向にあったことがわかる。ただし、幕末期の百科事典である『守貞漫稿』には、街道筋の宿泊費が幕末期になって急激に値上がりしたことが記されているので⁽³¹⁾、草鞋ばかりが高価になったわけではない。

それでは、表に掲載された草鞋の値段は、近世後期の街道筋の物価に照らしてどのように位置づけることができるのであろうか。そこで、表中の旅日記の中で、購入した物の値段が最も詳細に書き留められている『伊勢参宮覚』(1845)を取り上げてみよう。この旅では草鞋は平均15文程度で買い求められている

(30) 表2は以下の旅日記を基に作成した(著者名は省略)。

「道中日記」(1803)『谷合氏見聞録』青梅市文化財保護委員会、1974、84～86頁。／「意雑紀」(1807)『伊勢道中記史料』世田谷区教育委員会、1984、190～204頁。／「道中記」(1809)『江東区資料 牧野家文書二』江東区教育委員会生涯学習課、1995、18～27頁。／「道中日記帳」(1829)『江戸時代の庶民の旅』古文書を探る会、1981、7～16頁。／「道中日記」(1842)『大宮町史 史料編』大宮町役場、1980、162～167頁。／「伊勢参宮覚」(1845)『伊勢道中記史料』世田谷区教育委員会、1984、1～41頁。／「伊勢太々金毘羅道中記」(1852)『小川町史 上巻』小川町、1982、479～491頁。／「道の記」(1852)『伊勢道中記史料』世田谷区教育委員会、1984、205～213頁。／「伊勢参宮道中記」(1853)『城山町史2 資料編近世』城山町、1990、678～686頁。／「道中日記帳」(1863)『阿見町史編さん史料集(四)』阿見町、1980、115～143頁。／「旅中日用記」(1864)『狛江市史史料集 第十』狛江市、1979、68～86頁。

(31) 喜田川守貞「守貞漫稿」(幕末期頃)『近世風俗志(守貞漫稿)(一)』岩波書店、1996、218頁。

表2 関東地方の庶民の旅日記にみる草鞋の値段

旅日記の名称	年代	平均額／1足	最高額／1足	最低額／1足
道中日記	1803年	12文	12文	12文
意雑紀	1807年	13文	14文	12文
道中記	1809年	13文	13文	12文
道中日記帳	1829年	10文	10文	10文
道中日記	1842年	14文	16文	11文
伊勢参宮覚	1845年	15文	20文	12文
伊勢太々金毘羅道中記	1852年	16文	24文	12文
道の記	1852年	20文	26文	16文
伊勢参宮道中記	1853年	32文	32文	32文
道中日記帳	1863年	72文	72文	72文
旅中日用記	1864年	50文	100文	18文

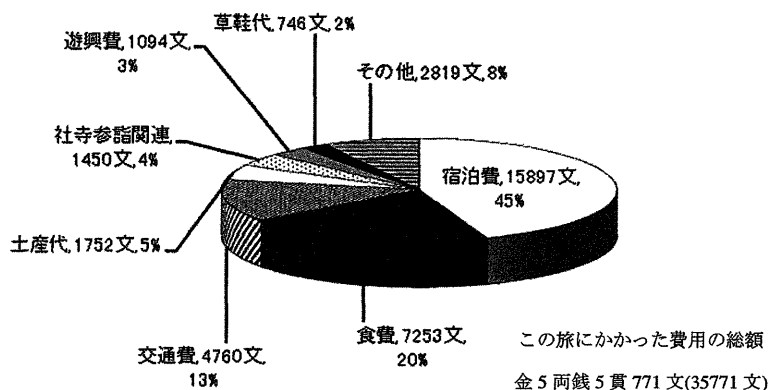


図7 『伊勢参宮覚』(1845)に見る旅費の消費内訳※

※田中国三郎「伊勢参宮覚」(1845)『伊勢道中記史料』世田谷区教育委員会、1984、1～41頁より作成。

が、これは酒(約15文)や餅(約15文)などと同額であり、そば(約32文)よりも安かったことがわかる⁽³²⁾。また、同史料を基に作成した旅費の消費配

(32) 田中国三郎「伊勢参宮覚」(1845)『伊勢道中記史料』世田谷区教育委員会、1984、1～41頁。

分を示すグラフ(図7)をみると、『伊勢参宮覚』の旅の消費金額全体に占める草鞋購入費の割合はわずか約2%に過ぎなかったことがわかる。

このようにしてみると、近世後期の街道筋において草鞋は比較的安価な物品として位置付けることができよう。

ところで、表2をみると、史料によっては「最高額」と「最低額」の数字に顕著な差異が認められるが、これは草鞋の質の問題と関わっている。先に引いた『江の島まうで浜のさゝ波』に「価ををしまずよきわらじをもとめはくべし」⁽³³⁾と説かれているように、草鞋にも値段によって品質の良し悪しが生じたと考えるためである。草鞋の質を旅人が意識していたことは、嘉永3(1850)年に新田郡新田村から伊勢へ旅立った者の日記に「梅沢と申す処、わらじ至って能なり。餘分一足求め行くべし。」⁽³⁴⁾と記されていることから窺えよう。

なお、先に足に馴染まない草鞋を履いた場合に生じ得る草鞋食いという現象について述べたが、当時の旅人にとっての草鞋の質とはこうした「履き心地」のみならず「耐久性」とも関連していたものと思われる。そこで次に、旅日記の分析を通して草鞋の耐久性に触れることにしたい。

4-2 旅日記にみる草鞋の耐久性

ここでは、草鞋の耐久性を「日数」によってではなく、前回購入した地点からの「歩行距離」を基準として把握することにしたい。これによって、当時代における草鞋が距離にしてどの程度の歩行に耐え得るものであったのかが明らかとなる。こうした観点から、『道中日記』⁽³⁵⁾(1842)、『伊勢参宮覚』⁽³⁶⁾(1845)、『伊勢太々金毘羅参り道中記』⁽³⁷⁾(1852)の旅における江戸～伊勢間(往路)の記述を基に、草鞋の購入頻度に関する一覧表を作成した(表3)。

(33) 平亭銀鷄「江の島まうで浜のさゝ波」(1833)『神奈川県郷土史料集成 第七輯 紀行篇』神奈川県図書館協会、1972、240頁。

(34) 栗原順庵「(表題不明)」(1850)『伊勢金毘羅参宮日記』金井好道、1978、12～93頁。

(35) 先崎長次平「道中日記」(1842)『大宮町史 史料編』大宮町役場、1980、162～167頁。

(36) 田中国三郎「伊勢参宮覚」(1845)『伊勢道中記史料』世田谷区教育委員会、1984、1～41頁。

(37) 小堀小四郎「伊勢太々金毘羅道中記」(1852)『小川町史 上巻』小川町、1982、479～491頁。

表3 旅日記にみる草鞋購入の頻度

	道中日記 (1842年)			伊勢参宮覚 (1845年)			伊勢太々金毘羅参り 道中記 (1852年)		
購入 回数	購入 場所	値段	前回から の距離	購入 場所	値段	前回から の距離	購入場 所	値段	前回から の距離
1回目	藤沢	16文	約48.1km	川崎	20文	約40.9km	藤沢	24文	約48.1km
2回目	箱根	16文	約48.6km	畑	16文	約70.4km	久能山	16文	約123.4km
3回目	沼津	12文	約20.5km	興津	14文	約71.5km	藤枝	16文	約27.4km
4回目	由比	14文	約33.1km	府中	12文	約19.8km	森町	16文	約38.1km
5回目	森町	11文	約89km	岡部	14文	約13.6km	いぬい	12文	約23.4km
6回目	不明	14文		島田	13文	約19.6km	岡崎	30文	約103.1km
7回目	不明	14文		掛川	14文	約17.7km	池鯉鮒	16文	約14.9km
8回目	鳴海	14文		坂下	18文	約33.1km	名古屋	12文	約24.7km
9回目	桑名	14文	約52.7km	新聞	32文	約53.6km	桑名	12文	約38km
10回目	不明	14文		鳴海	18文	約71.6km			
11回目				日永	12文	約69.6km			
12回目				白子	12文	約16.9km			
平均		14文	約48.6km		15文	約41.5km		16文	約49km

表3によると、草鞋購入の間隔（＝歩行距離）は最短約13.6kmから最長約123.4kmまでと幅広いが、平均的に見れば概ね40～50km程度の間隔で新たな草鞋が購入されている。ゆえに、当時の旅において草鞋は40～50km程度を歩むと交換の時期に達していたと考えてよからう⁽³⁸⁾。

ここに草鞋の耐久性が明らかとなったが、その距離的な間隔をよりイメージし易くするために、表中の旅日記のうち『伊勢参宮覚』の旅にみられる江戸～伊勢間（往路）の草鞋購入の実際を地図上（図8）に表現した。

(38) 擦り切れて必要なくなった草鞋を旅人はどのように処理したのであろうか。このことについて、石川は「東海道のように人通りの多い街道を行く旅人は、すり減った草鞋を決まった場所に捨てる風習があった」と述べ、「今なら、捨てたものはごみにしかならないが、藁は良い堆肥になるため、近在の農家の人がすぐに持って行った。ここを通る人には農民も多く、そのことを知っていたから、同業者が持って行きやすいように決まった場所で捨てたのである。」との見解を示している（石川英輔『ニッポンの旅—江戸達人と歩く東海道—』淡交社、2007、152～153頁）。

かもたない。」⁽⁴⁰⁾ などといった見聞録と符号する。したがって、草鞋は水分に弱い履物であったために、雨天時には頻繁に交換する必要があったといわねばならない。

5. おわりに

本稿において検討した結果は、以下のように整理することができる。

1. 旅の移動が徒歩中心であった近世において、旅人の足（脚）に対する気配りは並々ならぬものがあり、そのような観点から履物としての草鞋が重要視されていた。
2. 名所図会の挿絵の分析を通して旅人の草鞋着用の割合を検討した結果、8～9割程度の旅人が草鞋を着用していたことが確かめられた。その中であって、道中の履物として草履を選び採る旅人も少数ながら存在したが、それは草鞋と併用する形で使い分けられていた可能性が示された。
3. 絵画史料を分析してみると、街道筋では至るところで草鞋が販売されていたため、旅人はいつでも草鞋を交換することが可能であった。
4. 近世後期の街道筋において草鞋は比較的安価で販売されていたが、値段によって質が異なっていたことが示唆された。
5. 草鞋の耐久性を旅人の歩行距離と関連付けて検討した結果、草鞋は40～50km程度を歩むと交換の時期に達していたことがわかった。また、草鞋は水分に弱い履物であったため、雨天時には頻繁に交換する必要があった。

※本稿は、科学研究費補助金・若手研究（B）による助成を受けた研究成果の一部である。

(39) ツェンペリー「江戸参府随行記」高橋文訳『江戸参府随行記』平凡社東洋文庫、1994、144頁。

(40) サトウ「明治日本旅行案内」庄田元男訳『明治日本旅行案内 上巻 カルチャー編』平凡社、1996、28頁。